

# オーラルヒストリーによる地域メディアの可能性

—大学生によるタウン誌作成の実践を通じて—

法政大学キャリアデザイン学部 梅崎 修

川崎商工会議所 佐藤 憲

株式会社ディーバ 寛 隆太

## 要旨

本稿は、大学生によるタウン誌の作成・販売という一つの実践活動を通して、地域づくりと若者の学びを関連付けながら考察する。本稿では、実践対象である神楽坂地域において、他タウン誌と同様に学生のタウン誌が果たした役割を確認できた。次に、販売まで過程が入ることによって学生への負担が大きくなるが、同時に地域へのコミットメントが生まれることが確認できた。また、学生たちがタウン誌の編集者・記者という立場で地域に参加

することは、学生への教育にも良い影響を与えていた。その一つは異質な他者の声に耳を傾けることから生まれる深い洞察であり、もう一つは地域から求められる複数の役割に答えるために鍛えられる能力である。さらに、深く参加したからこそ生まれる地域に対する愛着が生まれることが確認できた。

キーワード：地域メディア、タウン誌、まちづくり、オーラルヒストリー

## Possibility of Community Media Development Using Oral History : A Practical Exercise in which University Students Created a Local Paper

Faculty of Lifelong Learning and Career Studies, Hosei University

Osamu Umezaki

Kawasaki Chamber of Commerce and Industry

Ken Sato

DIVA CORPORATION

Ryuta Kakehi

## Abstract

We examined community development in association with young people's learning by running a practical exercise in which university students compiled and sold a local town paper. In the Kagurazaka area of Tokyo where the exercise was conducted, we observed that the students' local paper had its own role, just like the other papers. The students also had to take on the extra burden of sales, which were part of the exercise, but this helped them to build commitment to the community. Moreover, their involvement in

the community as editors or reporters for the local paper had certain educational benefits: the experience facilitated the development of deep insight through listening to strangers and trained the students to fulfill the multiple roles expected by the community. Lastly, the process of deep involvement with the community gave rise to an emotional attachment to the community.

**Keyword:** Local media, Town magazine, Community Planning, Oral history

## I はじめに

本稿は、大学生によるタウン誌の作成・販売という一つの実践活動を通して、地域づくりと若者の学びを関連付けながら考察する。我々は、この考察のために約8年間の実践とその観察を続けてきた。後述するように、継続が困難であると言われるタウン誌の業界にあって、行政や企業などの支援なしに、学生だけで1号から7号までのタウン誌刊行ができたのは、全国的にも稀な事例と考えられる。本稿では、この活動の軌跡を振り返りつつ、実践の中で生まれた反応の数々を考察する。

本稿で取り上げるタウン誌の作成と販売には、他のタウン誌ではあまり見られないオーラルヒストリーの利用という特徴がある。オーラルヒストリーとは、「聴き手と語り手の共同作業によって、語り手が経験した過去の出来事を語りの形で記録に残すこと、又そうして保存された口述資料のこと」である。

我々は、地域研究のためにオーラルヒストリーの手法を選択し、その記録を地域に伝える方法としてタウン誌という地域メディアを選択した。これらの選択は、最初から計画的に行われたわけではなく、偶然も含めた試行錯誤の結果である。その意味では、我々の実践は地域研究のアクションリサーチであると言えよう。

地域活性化には、「よそ者、若者、馬鹿者」が推進力になると言われている（三藤（2006）など参照）。敷田（2005、2009）では、よそ者の効果を「技術や技能などの知識を地域へ移入、創造性の励起や地域の持つ知識の表出支援、地域の変容の促進、そしてしがらみから離脱した問題解決などがある」とまとめている。一方、敷田（2005、2009）は、よそ者効果が機能するためには工夫が必要であることも指摘し、よそ者の持ち込む知識や技能が地域を変容させたように彼らには見せながら、実際にはそうした知識や技術を新たな文化に昇華させるという「相互変容」のプロセスが必要であると主張した。

よそ者の視点で地域住民が気付かない地域の良さを発見すること、つまり表出支援は、オーラルヒストリー活動と重なる。学生による地域活動は、多くの事例が挙げられるが、オーラルヒストリーとタウン誌の組み合わせは少ない。実際、この実践に多くの困難があることを踏まえれば、我々の活動を事例研究として失敗も成果も報告する意義はあろう。多くの学生たちと地域活動家、さらにそれらを支援する人たちにこの事例報告が読まれることを期待している。

なお、本稿の構成は以下の通りである。続く第2節では、オーラルヒストリーと地域メディアの先行研究を紹介する。第3節では、実践地域の説明をする。第4節では、オーラルヒストリーによる地域メディアの創造につ

いて、その活動の詳細を説明する。第5節では、オーラルヒストリーによるタウン誌作成が地域や学生に与えた効果を考察する。第6節は、まとめである。

## II 先行研究

### 1 地域と教育におけるオーラルヒストリーの役割

オーラルヒストリーという方法は、歴史研究の史料としてだけではなく、研究者以外の市民の地域活動の一環として利用されている。高齢者の記憶を集めて地域の歴史を探る作業は、一部の歴史学者だけに占有されたものではなく、その地域の住民にとっても掛け替えのない活動である。ローカル・アイデンティティの醸成ともつながるコミュニティ・オーラルヒストリーは、英国では1970年から発展し続け、日本でも1980年代以降に広がった（トンプソン（Thompson）[2000]、酒井（2008）参照）。また、後藤ら（2005）は、新しいまちづくりの道具としてオーラルヒストリーを使うことを提案している。後藤ら（2005）によれば、地域を生命体のアナロジーとして理解する場合、コミュニティによって脈々と受け継がれていた「地域遺伝子（社会的記憶）」とでも呼ぶべきものの存在を想定することが可能であり、オーラルヒストリーはそれらを発見する道具として位置づけられている。この「地域遺伝子」を基にしながら将来のまちづくりを構想することの重要性が指摘されている。

他方、オーラルヒストリーは教育実践としても早くから注目されていた。アメリカの高校教師のエリオット・ウィギンズ（Eliot Wigginton）によって1966年に創始されたFox Fireプログラムは、オーラルヒストリーを使った教育実践であった（藤井（2009）参照）。氏は、大学で習った教授法が学生の読み書き能力の向上に効果を上げないことに気づき、「創作作文」という科目においてオーラルヒストリーを利用することを思い付いた。具体的には、生徒たちが地域社会に住む人々に対するインタビュー調査をして、採取された語りを基にした雑誌の制作・販売を行った。このFox Fire誌を編集した一連の選集は大ベストセラーとなった。学生たちは、この一連の作業に熱中し、作業の中で読み書き能力、さらに聴く能力を鍛えたと言えよう。日本では、Fox Fireプログラムの影響を受けて2002年から「森の“聞き書き甲子園”」がはじまり、森と関わるさまざまな職種の「森の名手・名人」を訪ねたオーラルヒストリーをしている<sup>1</sup>。

加えて、オーラルヒストリーは、自律的キャリア形成を促すキャリア教育としても注目されている。梅崎（2011a）では、間接経験による学習であるオーラルヒストリー教育の特質として、「不完全性」、「媒介性」、「異

質性」を挙げている。ここでは、まず他人の経験を間接的に学習する際、「自分にとって役立つ経験」だけに注目してしまうという問題が指摘されている。このような他者経験の道具的利用は、結果的に経験の理解を浅くしてしまう。他者の経験を自分のために聴くのではなく、読者というもう一人の他者を意識しながら聴き、なおかつ編集しようとする時に理解は深くなる。すなわち、聴き手は他者の経験を聴くことが「媒介性」「不完全性」を伴うことであることに気づき、語り手の「異質性」も理解する。

ところで、これらのオーラルヒストリーは、失われつつある学びを取り戻す試みでもある。なぜなら、若者が年配者のキャリア経験を聞く機会は近代化によって失われているからである。フランス史を専門とする横原茂氏は、近代化とともに変化した大人と子供の関係を検討し、子供が大人の話を書く仕組みが無くなったことを指摘している（横原（2009）参照）。たとえば、フランス農村では中世以来「夜の集い」と呼ばれる慣行があり、近隣の老若男女が1軒の家に集い、さまざまな手仕事をしながら、薪や灯火の節約をかねて冬の夜長をともに過ごしていた。すなわち、地域オーラルヒストリーの教育実践は、世代間交流による若年者の職業・人生観育成の場の再構築でもある。

## 2 地域メディアと地域コミュニティ

次に、地域メディアが地域コミュニティに与える影響について先行研究を紹介したい。地域メディアについては、船津（2005）が次のように定義している（船津氏はコミュニティ・メディアと呼ぶ）。地域メディアは、身近な情報や地域の情報を提供するメディアであり、地方紙、地域紙、地域情報誌、フリーペーパー、折り込み広告、チラシ広告、自治体広報などの印刷媒体、また、地方ローカル局、CATV、コミュニティFM放送、同報無線、有線放送などの放送媒体、そして、パソコン通信やインターネットなどの新しいメディアがある。これらのメディアが提供する情報は、コミュニティに密着した地域の身近な情報である。また、コミュニティ住民の共通関心や共通利害の形成に必要とされ、コミュニティの抱える問題を把握し、人々のニーズに応える情報であり、なおかつコミュニティという観点から意味づけ、解釈し、再構成し、新たに創造した情報である。

ところでタウン誌は、印刷媒体による地域メディアと言える。タウン誌に関しては、田村紀雄氏による先駆的研究群がある。田村（2007）によれば、タウン誌と呼ばれる町の小雑誌が広がるのは、1960年代である。これ以前にも、「地域小新聞」とか「ローカル新聞」があったが、その内容も形式も大きく異なる。

このタウン誌ブームは、日本だけの現象でなく、アメリカ、カナダ、ヨーロッパでも起こった（アメリカではシティ・マガジンと呼ばれた）。田村（2007）は、この現象の背景に学生運動があると解釈する。大学や街頭で挫折した若者も成人になり、生まれ故郷や地方都市に移り、市民運動として、これまでになかったタイプの活字媒体を興したのである。

地域メディアの機能として、竹内・田村（1989）は、第1に地域関連情報の提示、第2に地域社会の統合性の推進、第3に地域での争点を積極的に提示し、住民の問題関心を喚起し、これに対する住民の要望や意見の交流の媒体になることを挙げている。さらに浅岡（2007）は、地域メディアを活用すれば、ローカル・アイデンティティの構築や地域イメージの内外への発信にもなることを指摘した。

ローカル・アイデンティティは、地域住民だけのものではない。『地域雑誌 谷中・根津・千駄木』を中心にローカル・メディア分析した岡村（2011）は、住民だけでなく、地域メディアの担当者、さらには来訪者も地域への愛着や望郷の気持ちを地域メディアの中で語り続けることの重要性を指摘している<sup>2</sup>。

以上の先行研究を踏まえると、本稿のオーラルヒストリーによるタウン誌作成は、従来のタウン誌作りの運動と内容的に同じであると言える。ただし、大学生がその活動に取り組む場合、タウン誌運営上の問題、地域活動への貢献の方法、さらに大学生への影響が生まれるであろう。

## III 実践地域の説明

### 1 神楽坂

神楽坂地域とは、東京都新宿区にあるJR飯田橋駅から東西線神楽坂駅までの神楽坂通りおよび、早稲田通り周辺一帯を指す。

神楽坂は、安政4年（1857年）頃に花街となってから明治から昭和初期まで、東京における有名な繁華街であった<sup>3</sup>。オイルショック以後、花柳界は衰亡の一途を辿り、バブル期に料亭の跡地に駐車場やマンションが建てられ、花街としての景観が損なわれていったが、現在でも、表通りから一步入ると静かな路地があり、住宅街の中にレストランや料亭などが見られる。

また、神楽坂には「神楽坂の五商店街」と呼ばれる、神楽坂通り商店会、神楽坂商店街振興組合、本多横丁商店会、神楽坂仲通り商店会、神楽小路商店会の5つの商店街があり、それぞれ特色ある活動を行っている<sup>4</sup>。さらに、料亭組合や芸妓組合が花柳界と街を結ぶ働きかけ



として、芸者衆の踊りの公演や、NPO 団体「粋なまちづくり倶楽部」による花柳界講座や落語の会など、街の特色を活かしたイベントが行われている。神楽坂は、他地域と比べて地域活動が盛んであり、まちづくり活動の先進地域と言えよう。

## 2 神楽坂タウン誌の歴史

神楽坂は、これまでに多くのタウン誌が刊行されてきた地域である。地域に対する住民の愛着心も高く、まちあるき観光の街であり、商店街や地域 NPO の活動が活発な神楽坂は、東京の他の地域と比較してもタウン誌が定着しやすい地域であると考えられる。しかし、そのような地域であっても人材不足などからタウン誌を刊行し続けるのは難しくなることが多い。本節では、ゼミのタウン誌作成の歴史を振り返る前に、神楽坂におけるタウン誌の歴史を説明しよう。

まず、神楽坂の代表的なタウン誌として、1994 年 7 月に創刊された『ここは牛込、神楽坂』があげられる。「立壁正子の仕事」をつくる会編集（2002）によれば、このタウン誌は、フリーライター立壁正子氏と作家の竹田真砂子氏によって刊行された。立壁氏が編集発行人となった。地元の方々に愛されたタウン誌であったが、立壁氏がお亡くなりになったので、2001 年に 18 号で終刊した。

2002 年には、企画・編集や広告制作などを行っている会社を運営している長岡弘志氏が、『かぐらむら』を創刊した（現在まで）。長岡氏は、「1 年ほど、神楽坂からタウン誌が消え、情報がまちに流通しなくなってしまったんです。そこで、「ここは牛込、神楽坂」に代わる冊子、タウン誌を出そうという機運がおこり、その会合に呼ばれたのがきっかけでした。<sup>5)</sup>と語っている。さらに 2003 年には、神楽坂生まれの元編集者であり、地元で飲食店も経営する平松南氏が『神楽坂まちの手帳』を発行した。ただし、『神楽坂まちの手帳』は、平松氏が体調を崩されたので、2007 年に惜しまれつつ、第 18 号で休刊した。これらの歴史を振り返ると、タウン誌を支える人たちの精神的な継続性が確認できる一方で、タウン誌が個人の努力に支えられている結果、その運営が難しくもなると理解できる。

本稿で取り上げる実践事例は、学生が取材から販売まで手掛けたタウン誌である。2006 年に刊行されたタウン誌は、2003 年度に設立された法政大学キャリアデザイン学部の梅崎修ゼミナールの 1 期生によって発行された。毎年 1 号刊行し、2012 年の第 7 号で休刊した。現在はインターネットサイト（しんじゅくノート）での記事作成に移行している<sup>6)</sup>。

## IV オーラルヒストリーによる地域メディアの創造

### 1 タウン誌刊行の経緯

本節では、梅崎ゼミがタウン誌制作を手掛け始めた経緯を説明する。当初梅崎ゼミは、地域研究の一環として、市ヶ谷キャンパスの地元である神楽坂の方々のオーラルヒストリーの実習を続けていたが、口述記録を研究資料として使うだけでなく、地域を対象としたアクションリサーチとしてタウン誌の刊行がはじまった。特筆すべきは、大学や地域からの費用負担がない点と教員の関与が限定的である点である。タウン誌制作は 2005 年に始まり、発刊費用を確保するため、広告と販売も計画された。また、記事の構成は個人インタビュー記事、特集記事、広告記事の 3 点となったが、基本的に教員は、オーラルヒストリーの講義とオーラルヒストリー記事の添削以外には関与しない。そのため、神楽坂住民、印刷会社とのやり取りは全て学生が主体となって行った。こうして作成されたタウン誌は、神楽坂の方々のキャリアをもとに雑誌を作りたいという思いから、神楽坂の象徴である「路地」とキャリアの頭文字である「c」を組み合わせ、『Roji(c)』（以下では、ロジック）とした。

第 1 号は、500 部を 300 円で完売しつつも赤字であったが、第 2 号では 1000 部に印刷部数を増加し、定価も 400 円に増やし、広告先も増やした結果、黒字になった。その後は販売計画を見直し、300 円 1000 部に落ち着くも、第 6 号からは東日本大震災の影響を受けて印刷費が上昇し、第 6 号は 800 部になった。第 7 号は 1000 部に戻すも、印刷費の高騰ゆえに赤字になった。

学生が刊行しているタウン誌で、なおかつ継続しているものは珍しいので、マスコミ取材も定期的に受けた<sup>7)</sup>。また、神楽坂でのイベントなどで販売会を継続していたので、地元住民にも徐々に知られるようになった。毎年継続的に購入している定期読者も生まれた。イベントでの販売会を通じて、学生と商店会や NPO とのつながりが深まった<sup>8)</sup>。これら一連の活動は、社会的にも評価され、2011 年には法政大学地域研究センターの「地域政策研究賞」(学生奨励賞)を受賞した。

表 1 神楽坂とゼミ活動の年表

年度	ゼミ活動	神楽坂の出来事
2001年度		『ここは牛込、神楽坂』が18号で終刊、編集実行人の立壁正子さん死去
2002年度		『かぐらむら』創刊(現在まで)
2003年度		『神楽坂まちの手帳』創刊号発行
2004年度	法政大学キャリアデザイン学部設置 学部シンポジウム「地域活動とキャリアデザイン」神楽坂で働く、生活する」の開催	
2005年度	梅崎ゼミ開始(3年生) 『神楽坂まちの手帳』の編集長 平松南氏が『ロジック』の編集ヘアドバイス	神楽坂をロケ地にしたフジテレビ系列のドラマ『拝啓、父上様』が放送
2006年度	『神楽坂まちの手帳』第1号刊行 読売新聞・朝刊「カグラビト」が好き! 神楽坂タウン誌法大生が発行 『神楽坂まちの手帳』の別冊「神楽坂発 江戸のお堀と坂のまち」にポラントニアとして参加 学内にて神楽坂の紹介イベント開催 神楽坂・書空フェスタ初出店(以降7号まで継続)	
2007年度	タウン誌『ロジック』第2号刊行 雑誌『いきいき』取材(社会人学生の藤代恵子) 神楽坂消防フェア初参加 株式会社エイチ・ユーのホームページにて過去の記事を公開開始(7号まで)	『神楽坂まちの手帳』が18号で休刊
2008年度	タウン誌『ロジック』第3号刊行 飯田橋ラムラのフリーマーケット参加 法政大学キャリアデザイン学生会学生助成「神楽坂マップ作成とまちあるきツアー」	『カグラザカヨコロジ』(路地裏にある雑貨店、カフェ、ギャラリーで構成)が誕生
2009年度	タウン誌『ロジック』第4号刊行 出版パーティー開催(以降7号まで継続) 牛込中央通り商店会のお祭りに参加。 眞隆太・梅崎修「集合行為」としての商業集積における課題―目黒通りのインテリアショップを事例に―『イノベーション・マネジメント』第7号	新宿区のポータルサイト『しんじゅくノート』がプレオープン(現在まで)
2010年度	タウン誌『ロジック』第5号刊行 前田建設工業との共同プロジェクト「記憶のデータベース作成」 法政大学キャリアデザイン学学生会学生助成「神楽坂大同窓会開催」 読売新聞・朝刊「タウン誌発行 人間学」法大ゼミ生、取材も販売も 東京新聞・地域版「思い出の神楽坂後世へ 法政大のゼミ 住民に聞き取り データベース化に取り組み」 生産性新聞「「記憶のデータ化」による「まちづくり」に挑戦」 自由ヶ丘学園の高木運携授業(その後継続) 中村友香・梅崎修「真龍としての路地裏維持の可能性―神楽坂における石畳路地の事例」『地域イノベーション』Vol.13	
2011年度	タウン誌『ロジック』第6号刊行 梅崎ゼミブログ開設 神楽坂の洋食屋トンド(取材先)にてゼミ生がアルバイト 法政大学地域研究センター「地域政策研究賞」学生奨励賞 授賞 法政大学学園祭初参加 赤城神社でのイベント、赤城マルシェに参加 神楽坂の「タウン誌café」に全国タウン誌に交じって展示	『あかぎマルシェ』(赤城神社の境内の販売会)の開始
2012年度	タウン誌『ロジック』第7号刊行(梅崎、研究休暇のため、休刊) 梅崎ゼミfacebook開設 法政大学白鷺ゼミ取材 神楽坂お店のポスター展開 『カグラザカヨコロジ』に取材協力 3年生を中心に、新宿区地域ポータルサイト「しんじゅくノート」に学生記者として参加。現在に続く。 釜石ボランティア参加	
2013年度	法政大学エクステンションカンパニー「チャリティー講座」大震災後の新しい社会イメーজの構想」開催 田中瑞季・梅崎修「地域コミュニティにおけるソーシャルキャピタル―神楽坂地域の喫茶店を事例にして」『地域イノベーション』Vol.5 大塚研(東京大学社会科学研究所・当時)がゼミを担当。 梅崎修・佐藤憲・眞隆太・熊田和彦・唐澤克樹「震災後社会における事業活動の実態と可能性―釜石地域を事例に―」『地域イノベーション』Vol.6 『しんじゅくノート』の梅崎ゼミのページが開設。	

資料出所) 筆者作成。

## 2 タウン誌の作成・販売スケジュール

『ロジック』の作成・販売は、大学3年生の7月から4年生の12月までの約1年と半年の間で進められる。本項では、具体的なスケジュールを説明したい。

まず、大学3年生の4月から6月にかけて、インタビュー調査に関する文献をゼミ内で輪読する。オーラルヒストリーに関しては後藤・田口・佐久間〔2005〕や酒井〔2008〕など、インタビュー手法に関しては、永江（2002）などがテキストとして選ばれた。インタビュー論に関するゲスト講師をお呼びした授業も行われている（梅崎〔2011b,2012,2013,2015〕）。

また、同じ時期に神楽坂のまち歩きを行い、5月に開催される青空フェスタに参加することで、神楽坂商店街との交流を深める。7月に入ると、『ロジック』編集会議が始まり、販売価格や部数・発行日などのスケジュー

ルから、個人インタビュー記事・特集記事・広告記事の内容について検討が行われる。4年生の5月に開催される神楽坂商店街イベントの青空フェスタで販売を開始することを目標に、作成計画が立てられていく。

夏季休暇には、地域調査合宿を実施する。神楽坂との地域比較調査とインタビューの実践を目的として、調査地域の商店街や行政機関などにインタビューを行う。調査合宿の報告は、世代によって媒体（ブログ等）は異なるが、地域に還元される。

夏季休暇明けの9月からは個人記事インタビューの対象者を決定し、インタビューが開始される。まず、対象者へのアポイント取りから始まり、下調べを行った上で、インタビューを実施する<sup>9)</sup>。約2時間のインタビューが録音されたテープレコーダーから文字起こし作業（テープ起こし）をゼミ生一人ひとりが行う。10月には、

表2 作成・販売スケジュール

学年	月	イベント	『ロジック』関連				備考
			全体	個人インタビュー記事	特集記事	広告記事	
3年	4月	・ゼミ開始					
	5月	・文献輪読					
	6月	・神楽坂調査開始					
	7月		・販売価格、印刷部数、発行日、販売場所を検討	・インタビュー対象者検討	・テーマ決め ・テーマごとにチーム分け →3チーム程	・対象検討 →既存広告と新規広告開拓を検討 ・営業担当範囲決定	・ゼミ生による資金確保
	8月	・地域調査合宿 →神楽坂との比較	〃	〃	〃	〃	
	9月		〃	・アポ取り ・下調べ ・インタビュー実施 ・テープ起こし	〃	〃	
	10月	・編集ソフト (InDesign,Photoshop,Illustrator)勉強会開催		〃			
	11月	・缶詰合宿 →個人記事完成を目標		・プロローグ、エビローグ作成 ・本文作成 ・編集、校正 →InDesign使用		・アポ取り ・営業活動 ・広告記事回収 ・広告記事作成 →3月中旬頃まで	
	12月		・印刷会社決定	・取材先へ確認	・アポ取り ・取材 ・編集、校正	〃	・就職活動の開始で、編集活動が鈍化
	1月		・販売価格、印刷部数、発行日、販売場所最終決定	〃	〃	〃	
	2月		・表紙、編集後記、目次等全体に関する編集作業	〃	〃	〃	
	3月		・入稿			〃	
4年	4月	・出版記念パーティー	・『ロジック』発行				
	5月	・青空フェスタ →販売活動開始					
	7月	・神楽坂まつり (ほおずき市・阿波踊り大会)→販売活動					
	8月						
	9月						
	10月	・自主法政祭(学祭)、 青空市→販売活動					
	11月	・防災ふれあい広場 →販売活動					
	12月						
	1月						
	2月						
	3月	・卒業式					

資料出所) 筆者作成。



『ロジック』を作成する際に使用する編集ソフトの勉強会を開催する。11月に個人記事を完成させるために合宿（通称：缶詰合宿）を実施し、この合宿期間中にエピソード・プロローグなどのインタビュー部分以外も執筆し、個人記事を概ね完成させる。個人記事作業が落ち着いたころから、新規開拓も含めた広告記事の営業活動が始まり、印刷会社に入稿する3月末まで広告記事の営業と広告記事作成が行われる。

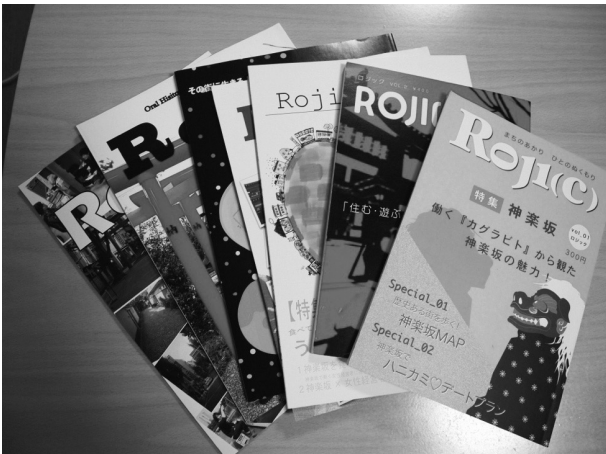
3年生の12月から就職活動が始まる影響で、『ロジック』の編集活動が鈍化してしまうが、この時期に印刷会社が決定し、同時に特集記事の取材・編集と個人記事の確認作業が2月末頃まで行われる。年明けの1月には、販売価格・部数・発行日を最終決定し、2月からは、『ロジック』全体に関わる表紙・目次・編集後記の編集作業が入稿の直前まで行われる。

3月に個人記事・特集記事・広告記事の最終確認が行われ、印刷会社に入稿し、『ロジック』が発行される

（図1）。発行された『ロジック』は、販売活動の前にインタビュー先・広告を掲載頂いた方々へ、お礼の挨拶と共に持参する。

4年生の5月の青空フェスタから本格的な販売活動を開始し、7月の神楽坂祭り（ほおずき市・阿波踊り大会）・10月の学園祭・11月の防災ふれあい広場で販売する（図2）。また、4号から開始した出版パーティーでは、語り手や地域の方々、ゼミ生およびゼミ生OBOGを集めた交流が行われる。イベント以外でもゼミ生各々で、12月頃まで損益分岐点を考えながら販売活動を続けられていく。販売場所は、当初、青空フェスタと呼ばれる地元のお祭りがメインであったが、その後、販売先を調べ、フリーマーケットなどの数々の地元イベントに参加した。また、後輩のゼミ生達に地元住民との顔合わせを含めた『ロジック』作成の編集と販売についての引き継ぎ作業が随時行われる。

図1 『ロジック』（全7号）



資料出所) 筆者撮影。

### 3 オーラルヒストリー・地域アーカイブ

オーラルヒストリーをタウン誌に載せることは、短期的には地域メディアを使った発信になるが、中長期的には、特定地域におけるオーラルヒストリーのアーカイブを構築することになる。完成したタウン誌を図書館に保存することだけでなく、我々は、オーラルヒストリーの記事をWeb上で公開した。株式会社エイチ・ユーの教育事業部に管理してもらっている「地域活動とキャリアデザイン-神楽坂で働く、生活する-」である<sup>10</sup>。

タウン誌で取材したオーラルヒストリー対象者は、全7号で86名になる（表3参照）。神楽坂地域が商業地域であるので、商店店主が多いが、お寺やNPOなどの非営利団体も含まれる。これを地図上に表示すると、図3のようになる。後藤ら（2005）は、オーラルヒストリーによって掘り起こされる社会的記憶の重要性を指摘しているが、ここでの語りの集積は貴重な地域資源として現在も利用可能であろう。

なお、オーラルヒストリーを利用する方法で記録する試みとしては、第5号で行われた前田建設株式会社と一緒にやった産学連携プロジェクトがある。この時は、前田建設が開発中のデータ検索システムを使ってオーラルヒストリーのデータベース化の試作版を作成した<sup>11</sup>。この試みは、継続することはできなかったが、データベース完成の際には、地域の方々を招いたイベントを開催し、語り手と聞き手、さらに読み手の間での社会的記憶の共有が行われた。

図2 神楽坂での販売



資料出所) 筆者撮影。

表3 調査対象者一覧

NO	号数	名前	性別	職業	店名	大分類	小分類	インタビュー者名
1	1	福井 清一郎	男性	店主、神楽坂通り商店街会長	福屋	小売店	おせんべい屋	渡辺 真紀
2	1	橋爪 聡司	男性	店主、神楽坂商店街振興組合理事長	KIMURAYA	小売店	スーパー	宮原 涼子
3	1	高岡 崇	男性	前駅長	JR飯田橋駅	公共施設	駅	浅野 有花
4	1	嶋田 堯嗣	男性	住職	毘沙門天 善国寺	公共施設	お寺	木田 研一
5	1	吉田 浩	男性	店主	熱海湯	銭湯	銭湯	安藤 美緒
6	1	潮見 洋子	女性	支配人	ギンレイホール	映画館	映画館	金子 智
7	1	宮崎 由紀	女性	店主	和カフェ 茶寮	喫茶店	喫茶店	鈴木 真由美
8	1	浅野 比呂賀	男性	店主	茶館 バレアナ	喫茶店	喫茶店	舟城 善行
9	1	平井 益子	女性	店主	リサイクルきもの たんす屋	小売店	リサイクル着物	山田 愛子
10	1	岩谷 兼明	男性	前店主	神饌料理 赤城亭	飲食店	神饌料理	有國 雅俊
11	1	伊達 紀久子	女性	店主	MISS URBAN	小売店	洋服店	星野 友香
12	1	金井 秀樹	男性	代表取締役	南STPD ファーストゲート	飲食店	料理店	的場 淳
13	2	風山 繁子	女性	園長	赤城幼稚園	教育施設	幼稚園	荒川 佳恵
14	2	増田 利正	男性	店主	工房 夢小路	小売店	工房	小林 真友乃
15	2	和田 洋逸	男性	店主	和写真館	その他サービス業	写真店	齋藤 明日香
16	2	日置 圭子	女性	NPO法人副理事長	粋なまちづくり倶楽部	非営利団体	NPO法人	加藤 弘子
17	2	ファストロ・ステファノ	男性	オーナーシェフ	RISTRANTE STEFANO	飲食店	料理店	高橋 珠利
18	2	杉田 智子	女性	経営者	Eコパオ	その他サービス業	鍼灸・温熱治療院	川角 麻衣子
19	2	伊藤 直子	女性	オーナー	SESSION HOUSE	その他サービス業	スタジオ	飯塚 美香子
20	2	大島 信久	男性	団長	吹きだまり	劇団	劇団	平岡 麻友子
21	2	峰岸 綾子	女性	女優	吹きだまり	劇団	劇団	平岡 麻友子
22	2	花形 輝雄	男性	店主、会長	京花、神楽坂切り絵かつば会	飲食店	日本料理	大澤 康太
23	2	渋谷 信一郎	男性	店主、組合理事長	千月、東京神楽坂組合	飲食店	料亭、組合	藤代 恵子
24	3	伊藤 亮介	男性	店主	大洋レコード	小売店	CD店	玉田 智哉
25	3	捧 恭子	女性	靴作家	belpasso	小売店	皮小物店	鷲尾 春果
26	3	中嶋 卓也	男性	店主	ル・トランブルー	飲食店	料理店	板谷 美希
27	3	山中 通生	男性	店主	おもいで	喫茶店	喫茶店	山上 直子
28	3	清田 予紀	男性	心理カウンセラー	-	その他サービス業	-	川上 智世
29	3	安倍 俊彦	男性	店主	も〜吉	飲食店	山形料理店	肆矢 純香
30	3	橋本 絹代	女性	店主	神楽坂とよ田	飲食店	料亭	広島 愛子
31	3	長岡 弘志	男性	編集者	かぐらむら編集部	出版社	編集社	鈴木 彩加
32	3	矢野 橋夫	男性	店主	日替わり定食の店トレド	飲食店	定食屋	籠 隆太
33	3	坂本 二郎	男性	店主、神楽坂まちづくりの会長	坂本ガラス店、神楽坂まちづくりの会	小売店	ガラス店、組合	間下 千安紀
34	4	喜友名 カトリヌ	女性	店主	本格カリー専門店 荏作亭	飲食店	料理店	中島 芳枝
35	4	渡邊 里絵	女性	店主	国産酒バーNaorai	飲食店	バー	中野 晃子
36	4	幸田 紀也	男性	店主兼印刷会社代表取締役	中古レコード屋MASH RECORDS	小売店	CD店	萩原 禎晃
37	4	清水 敬生	男性	店主	喫茶店キイトス茶房	喫茶店	喫茶店	堀井 美里
38	4	佐藤 亘	男性	陶芸家	陶芸家	その他サービス業	-	佐藤 憲
39	4	日野 貞明	男性	店主	真、フラスコ	小売店	小物店	相澤 静香
40	4	雑賀 淑子	女性	舞踏家	パレエ教室サイガ・パレエ研究所	その他サービス業	パレエ教室	中村 友香
41	4	小山 裕子	女性	NPO法人事務局長	NPO 新宿子ども劇場	非営利団体	NPO法人	小浦 のこ
42	4	青木 智志	男性	店員	KIMURAYA	小売店	スーパー	栗田 一希
43	4	田中 史郎	男性	店員	KIMURAYA	小売店	スーパー	栗田 一希
44	4	小林 真治	男性	会社員	新宿区地域産業振興課	公務員	新宿区	山尾 啓予
45	4	山下 修	男性	店主	山下漆器店	小売店	皿店	三好 英華
46	5	長谷川 健二	男性	店主	蕎麦亭	飲食店	蕎麦屋	田中 郁美
47	5	菊田 圭子	女性	店主	Furoshiki-ya やまとなでしこ	小売店	ふろしき屋	秋山 奈央
48	5	奈良村 昭二	男性	店主	キッチンえびす亭	飲食店	洋食屋	岡野 尚美
49	5	奈良村 玲子	女性	従業員	キッチンえびす亭	飲食店	洋食屋	岡野 尚美
50	5	渡辺 幸子	女性	画家/講師	サルビアアトリエ	その他サービス業	児童絵画教室	日暮 宏彰
51	5	照井 房枝	女性	美容師	マ〜サ美容室	その他サービス業	美容院	清水 恵
52	5	長岡 富美子	女性	校長	新宿区立愛日小学校	公務員	小学校	田中 美紗貴
53	5	古田 崇	男性	オーナー	ARBOL	飲食店	洋風創作料理店	中村 啓亮
54	5	渡久地 芳子	女性	店主	芭蕉布の里	飲食店	沖縄料理屋	榎山 由貴奈
55	5	小嶋 貴	男性	店主	神楽坂 EXPLOSION	娯楽施設	ライブハウス	中祖 大知
56	5	小澤 大輔	男性	教員	東京観光専門学校	教育施設	専門学校	田中 早也香
57	5	石井 祐輝	男性	学生	東京観光専門学校	教育施設	専門学校	田中 早也香
58	5	石川 邦彦	男性	店主	Tribes	飲食店	アフリカ料理	山田 実希
59	6	川崎 尊広	男性	従業員	ふうふう亭	飲食店	ラーメン屋	稲垣 亮
60	6	俵 哲夫	男性	オーナー兼料理長	TAWARA 神楽坂	飲食店	和食料理屋	古賀 沙織
61	6	長妻 直哉	男性	店主	相馬屋源四郎商店	小売店	文房具店	穴倉 明日香
62	6	渡辺 和枝	女性	店主	神楽坂地蔵屋	小売店	煎餅屋	塩谷 萌
63	6	臼澤 祐二	男性	店主	和食器「うす沢」	小売店	食器屋	森 隆太郎
64	6	臼澤 裕美	女性	従業員	和食器「うす沢」	小売店	食器屋	森 隆太郎
65	6	多田 昌子	女性	店主	花禅工房染小路	その他サービス業	工房	杉本 恵
66	6	藤々崎 瑞江	女性	従業員	まぐねっと point	小売店	雑貨屋	田中 夏葵
67	6	富永 玲奈	女性	従業員	まぐねっと point	小売店	雑貨屋	田中 夏葵
68	6	末岩 美智子	女性	店主	第三玉乃湯	銭湯	銭湯	田中 瑞希
69	6	竹谷 政幸	男性	従業員	和楽・おいしんぼ・久露茶亭	飲食店	料亭	村岡 麻衣
70	6	飯塚 則子	女性	店主	チャオ	飲食店	スナック	鈴木 秀典
71	6	松浦 多加文	男性	店主	corner poket	飲食店	ジャズバー	芹口 由佳
72	7	上馬 直泰	男性	カメラマン/オーナー	神楽坂写真館	その他サービス業	写真館	安西 優奈
73	7	井上 博夫	男性	支配人	鳥茶屋	飲食店	料亭	邱 韶婕
74	7	中山 大輔	男性	料理人	あかぎカフェ	喫茶店	喫茶店	山岸 美紀巨
75	7	長谷川 安助	男性	総支配人	五十番	飲食店	肉まん屋	井田 春那
76	7	三谷 智恵	女性	ハテナイエ	ハテナイエ サロン・ド・テ アミティ神楽坂	小売店	ケーキ屋	黒須 美樹
77	7	吉村 葉子	女性	イベント/店主	George Sand	小売店	焼き菓子屋	榎田 彩香
78	7	宗重 博之	男性	劇団代表	劇団黒テント	劇団	劇団	村上 優太
79	7	三上 透	男性	店主	花屋花豊	小売店	花屋	佐藤 晃司
80	7	駒場 政勝	男性	店主	神楽坂もんじゃ	飲食店	もんじゃ屋	佐藤 晃司
81	7	駒場 笑子	女性	従業員	神楽坂もんじゃ	飲食店	もんじゃ屋	佐藤 晃司
82	7	平岡 宙太	男性	店主	SKIPA	喫茶店	カフェ	霜田 麻衣
83	7	菅沼 孝次	男性	店主	dessert café・yuta	喫茶店	カフェ	霜田 友里恵
84	7	大内 光子	女性	理容師/店主	ル・ミリオン	その他サービス業	理容室	小林 拓也
85	7	吉田 浩	男性	店主	熱海湯	銭湯	銭湯	小場 美穂
86	7	松浦 孝俊	男性	社長	マツウラ・ダンス・スクール	その他サービス業	ダンススクール	加藤 純

注) 職業・店名は、インタビュー当時。

資料出所) 筆者作成。



図3 神楽坂地図への表示



資料出所) google map を使って筆者作成。

## V タウン誌の多面的な効果と課題

### 1 地域コミュニティへの効果と課題

オーラルヒストリーを行い、その記録をタウン誌として販売し続けることは、語り手と地域の読者、さらに読者同士を繋げるという意義があった。神楽坂は、新しいマンション建設などで新住民が増えている地域である。新住民側から見れば、お祭りでたまたま手にした『ロジック』が、市販のガイドブックとは違う等身大の地元を知るきっかけになるかもしれない。年数回の地元販売会では、「毎年、読むのを楽しみにしている」という読者の反応もあった。また、語り手を招いた出版パーティーでは、複数の語り手の方々が複数部を購入し、「お店の常連さんに配る」と発言している。神楽坂地域は、古い料亭や老舗が並ぶJR飯田橋駅寄りの地域と、住宅地である東西線の神楽坂駅周辺の地域に大きく分かれているが、学生による取材は地域を分け隔てなく取材しているので、両地域をつなげ、その上、世代間交流を生み出したと言える。

なお、タウン誌が地域メディアである理由は、読み物としてのタウン誌の直接的な効果だけではなく、「よそ者」かつ「若者」である大学生が、調査をしながらタウン誌を作り、販売するプロセス自体が人と人をつなげる

活動であるからと言えよう。また、タウン誌の刊行は、タウン誌間の交流も生み出した。第1号の作成段階では、『神楽坂まちの手帳』の平松南氏がアドバイザーとして参加し、学生も『神楽坂まちの手帳』にボランティアとして参加した。長岡弘志氏が2011年に開催した、全国のタウン誌の展示と茶話会（タウン誌 cafe）に『ロジック』も出展した<sup>12</sup>。

その一方で、タウン誌作成には多くの課題もあった。まず、多くのタウン誌が抱えている課題でもあるが、赤字にしないタウン誌運営は難しかった。むしろ『ロジック』の場合は、ゼミ活動なので、人件費はかからないが、印刷費を上まわる広告費＋販売費を得るのは難しく、東日本大震災後に印刷費が上がるとさらに難しくなった。

加えて、大学のゼミは3-4年生であり（現在は2年後期からゼミ開始）、卒業と同時にメンバーが全員入れ替わる。引き継ぎを行っても、運営の継続性を確保するのが難しい。結果的に教員のみが継続性を確保しているという状態になってしまう。ロジックを継続して購入している読者から見れば、毎回タウン誌には新規性が求められる。しかし、学生の方は、メンバーが代わったうえで一から雑誌作りを経験するので、徐々に取材先探しや企画記事の難易度が上がってくる。つまり、先輩のタウン誌との違いを見つけるのは難しいのである。

## 2 キャリア教育への効果と課題

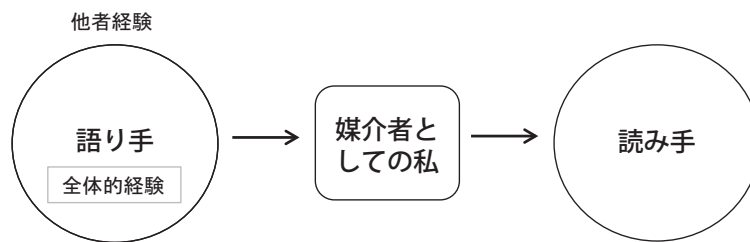
オーラルヒストリーの実施とタウン誌の作成は、学生にとっても貴重な学びになった。第一に、学問としてのオーラルヒストリーや地域マネジメントを実際のフィールドで体験的に学ぶという意義がある。タウン誌の効果を検証すること自体が地域研究である。このような調査実習は、多くの大学で行われているが、タウン誌という形を作ることで調査対象との距離も近くなる。個人研究でも成果を出す者も増えた。卒業後も大学院生や教員と一緒に論文執筆を行う学生もいた。現在、複数の雑誌にも投稿論文が掲載されている。

また、第2節で紹介したように、他人のキャリアを聴くという行為は間接経験による学習になる。むしろ将来、商店街で働く学生はほとんどいないが、世代も生活も異なる「異質な他者」である自営業者の人生経験を聴き、編集する行為を通じて多面的な解釈ができた学生も

多かった。同質集団に所属している学生にとっては、これまでにない経験であった。

ところで、オーラルヒストリー実習は、テープ起こしに多大な負担がかかる。2時間のインタビューならば、最短でも10時間のテープ起こしの時間が必要であろう。この作業をただ単に歴史資料の作成という目的のために行うのでは、学生への動機づけは難しい。読者を想定できるタウン誌では、刊行・販売という目標が学生への動機づけになる。抽象的な歴史資料のためにでもなく、自分自身のためでもなく、経験伝達の媒介者としての役割に気づき、如何に聴き、如何に編集するかを強く意識する。ミード (Mead) [1934] は、「他者」の期待を取り入れることで自我が形成されることを指摘し、その期待を受け入れることを「役割取得 (role-taking)」と考えたが、タウン誌作成の現場は自我が形成されるよい学習環境と言えよう (図4参照)。

図4 オーラルヒストリーの媒介性



資料出所) 筆者作成。

加えて、タウン誌作成は、語り手と読み手だけでなく、タウン誌を運営するために広告主や商店街との関係も意識する。それゆえ学生たちは、たくさんの役割獲得をすることになる (図5参照)。例えば、語り手の経験を伝える役割、読者に面白く、読み易い記事を書く役割、印刷費削減の役割、さらに広告主の要望に応える役割は、学生たちに相互の役割をどう処理するかという役割コンフリクト (role-conflict) という葛藤を生む<sup>13</sup>。役割コンフリクトには、1) 一つの地位に就くことで異なる期待が向けられる役割内コンフリクト、2) 二つ以上の地

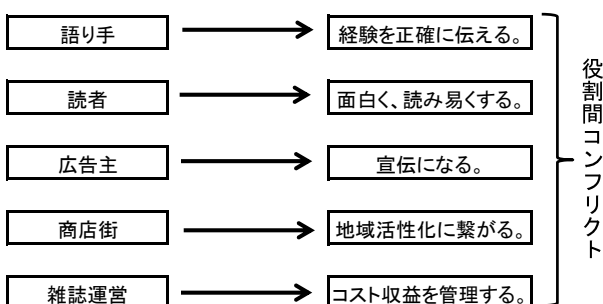
位に就くことで両立不可能な期待に向かい合う役割間コンフリクト、3) 自分自身と役割それ自体とのパーソン・ロール・コンフリクトの三種類がある (船津 (1989, 2005) など参照)。タウン誌作成の場合、役割間コンフリクトが当てはまる。

さらに、具体的なトラブルもあった。記事の用語解説で間違った記述をしたり、広告先の営業時間を間違えて記述したりした時には、取材先や広告先へ謝罪に行くということもあった。

これらの葛藤やトラブルは、学生にとっては大きな負担ではあるが、同時に成長を促す経験になっている。他者期待による役割取得はそのまま学びに繋がるのではなく、役割間コンフリクトを乗り越える過程で学ぶと考えられる。言い換えれば、そのコンフリクトに対して逃避するならば、学びが生まれないとと言える<sup>14</sup>。

もちろん、大きな課題もある。3年生11月頃から3年の3月まで記事作成と編集作業はピークを迎えるが、同時期は就職活動が本格化する時期でもある。記事作成後の編集は、印刷費を安く上げるために版下までこちら側で完成させる必要があり、それゆえに過度の負荷がかかる。ゼミをやめてしまう学生や負担の不公平感を持つ

図5 役割間コンフリクトの例



資料出所) 筆者作成。

学生が出てしまう。むろん、そのような過度の負荷の中でマネジメント能力は鍛えられるとも言えるが、能力に見合った負担、つまり現時点の能力を基準として少し難しい役割でなければ、大きな役割に押しつぶされてしまう。そもそも就職活動自体が学生にとっては大きな心理的負担なので、編集と就職活動を両立させるのは難しいと言えよう。

### 3 「地域への愛着」という資源

キャンパス近くの商店街は、学生にとっては、生活圏としての地元ではないが、オーラルヒストリーによるタウン誌作成と販売活動、アルバイト、又はイベント参加や飲み会などを通じて地域への愛着が育てられている。学習の場であり、特に遊びの場である神楽坂に対して他の地域とは異なる愛着を持たせたとしたら、この教育実践の思わぬ副産物と言えよう。卒業生たちがよく口にする「神楽坂に来ると落ち着く」「懐かしい」という発言、さらには神楽坂の調査先のお店に卒業後も通い続けている事実を知ると、神楽坂が学生たちにとっても「特別な場所」に変わったことがわかる。

コミュニティ・オーラルヒストリーの一つの役割は、地域に眠る社会的記憶を掘り起こすことで住民のローカル・アイデンティティを再構築することであった。学生という「よそ者」も、それぞれ2年間のゼミ活動を通じて住民とは異なる形でのローカル・アイデンティティを構築しているのではないか。大学という学びの場が、キャンパス内だけでなく周辺の街も含めた場であった方がよい理由は、このようなローカル・アイデンティティを人生の資源として獲得できるからである。

## 参考文献

- 浅岡隆裕 [2007]「地域メディアの新しいかたち」田村紀雄・白水繁彦『現代地域メディア論』日本評論社 pp.17-34
- 梅崎修 [2011a]「<オーラルヒストリー>が育てるキャリアデザイン力」『企業と人材』Vol.44 No.986 pp.21-25
- [2011b]「<資料紹介>オーラルヒストリーを使った教育実践—「森の“聞き書き甲子園”」の活動—」『生涯学習とキャリアデザイン』第8号 pp.95-107
- 梅崎修 [2012]「<資料紹介>ホストの世界に学ぶ会話術—頼朝氏のオーラルヒストリー—」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』第9号 pp.523-549
- 梅崎修 [2013]「<資料紹介>世代間交流としてのオーラルヒストリー—MEMORO「記憶の銀行」の事例—」『生涯学習とキャリアデザイン』第10号 pp.129-144
- 梅崎修 [2015]「<資料紹介>テレビのプロフェッショナルによるオーラルヒストリー—進め!電波少年からLife videoへ—」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』第12号(掲載予定)
- 岡村圭子 [2011]「ローカル・メディアと都市文化—『地域雑誌 谷中・根津・千駄木』から考える」ミネルヴァ書房
- 後藤春彦・田口太郎・佐久間康富 [2005]『まちづくりオーラルヒストリー—「役に立つ過去」を活かし、「懐かしい未来」を描く—文化とまちづくり叢書』水曜社
- 「立壁正子の仕事」をつくる会編集 [2002]『立壁正子の仕事』牛込倶楽部
- 酒井順子 [2008]『市民のオーラル・ヒストリー—歴史を書く力を取り戻す』かわさき市民アカデミー出版部
- サザンカンパニー [2009]『神楽坂アイコンマップ 改訂プレミアム版』
- 三藤利雄 [2006]「第10章 地域社会のイノベーション」坪郷實編、『参加ガバナンス 社会と組織の運営革新』日本評論社, pp.213-242.

## VI おわりに

本稿では、約8年の間、神楽坂地域において続けてきたオーラルヒストリーを使ったタウン誌の作成・販売の実践を事例報告としてまとめた。大学のゼミで地域調査を行うことは多いが、独自にタウン誌を販売している事例は少ないと言えよう。

大学生によるタウン誌の作成・販売という一つの実践活動を通して、地域づくりと若者の学びを関連付けながら考察する。本稿では、実践対象である神楽坂地域において、他タウン誌と同様に学生のタウン誌が果たした役割を確認できた。次に、販売まで担当することで学生への負担が大きくなるが、同時に地域へのコミットメントが生まれることが確認できた。また、学生たちがタウン誌の編集者・記者という立場で地域に参加することは、学生への教育にも良い影響を与えていた。その一つは、異質な他者の声に耳を傾けることから生まれる深い洞察であり、もう一つは、地域から求められる複数の役割に応えるために鍛えられる能力である。最後に、地域に深く参加したからこそ地域に対する愛着が生まれることが確認できた。

我々は、本稿の事例検討を通して「調査実習」、「大学」、「地域」の概念を広げることができた。調査実習は、大学内だけのものでもないし、大学という学びの場はキャンパス内だけではない。そして地域も住民だけで完結するものではない。我々の取り組みが全国で同じような取り組みを行っている人たち、さらにこれから取り組もうと思っている人たちの役に立てばうれしい。他地域の実践との比較は、未来の課題としたい。



- 敷田麻美 [2005]「よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究」『江湾の久爾』第50号 pp.74-85  
——— [2009]「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』第9号 pp.79-100
- 竹内郁郎・田村紀雄 [1989]『新版・地域メディア』日本評論社
- 田澤実・梅崎修・八幡成美・下村英雄 [2010]「「相談」という行為を通じたキャリア意識の向上—CAVTを使った効果測定を試み—」  
『キャリアデザイン研究』第6号 pp.69-81
- 田村紀雄 [2007]「市民が所有する地域のジャーナリズム思想」の出現」田村紀雄・白水繁彦『現代地域メディア論』日本評論社
- 永江朗 [2002]『インタビュー術!』講談社現代新書
- 船津衛 [1989]『ミッド自我論の研究』恒星社厚生閣
- 船津衛 [2005]『自我の社会学』放送大学教育振興会
- 藤井大亮 [2009]「オーラル・ヒストリーを導入した米国の歴史授業実践の分析—Foxfireアプローチの視点から」『中等社会科教育研究』  
(28),pp.1-15
- 横原茂 [2009]「オーラルヒストリーと教育」『島根大学教育学部紀要・教育科学・人文・社会科学・自然科学』42別冊 pp.25-32
- 渡辺功一 [2007]『神楽坂がまるごとわかる本』展望社
- G.H.Mead [1934] Mind, Self, and Society from the Standpoint of a Social Behaviorist, by C.W. Morris, University of Chicago Press=1973 稲葉三千男・滝澤正樹・中野収(訳)、『精神・自我・社会』青木書店
- Paul Thompson [2000] The Voice of the Past: Oral History 3rd ed. Oxford (ポール・トンプソン [2002]『記憶から歴史へ—オーラル・ヒストリーの世界』青木書店)

## 注

- 1 梅崎 (2011b) 参照。
- 2 岡村 (2011) は、行政の区分に縛られない領域を議論するため、またグローバルとの関係性を明確にするために「地域メディア」ではなく、「ローカル・メディア」と定義している。
- 3 「花街」は、三味線や唄おどりなどで、酒席を盛り上げる芸妓の生きる街を示す。現在、東京では、新橋、赤坂、柳橋、神楽坂、向島、浅草の6花街を残すのみとなっている(渡辺 [2007, p.53, p.60])。
- 4 各商店街は、「伝統と現代がふれあう粋なまち」を目標にまちづくりを進めている。具体的には、各商店街におけるイベントの開催、店舗の優れた商品やサービスの表彰、ポイントカードやタウン誌の発行、HPやインターネットサービスによる神楽坂情報発信サービス等を行っている(サザンカンパニー (2009,pp.30-31) 参照)。
- 5 「立壁正子の仕事」をつくる会編集 (2002)
- 6 しんじゅくノート「神楽坂の達人」  
([http://shinjuku.mypl.net/mp/tatsujin\\_kagurazaka\\_shinjuku/?sid=7206](http://shinjuku.mypl.net/mp/tatsujin_kagurazaka_shinjuku/?sid=7206))
- 7 2009年12月22日読売新聞朝刊など。
- 8 地元のイベントでは、タウン誌の販売のみをしているのではなく、アルバイトなどの参加も続けられた。
- 9 自分が記事を作成する語り手以外の調査にも聞き手として参加する。第一に、一人だけで聞き取るのは難しいので、メインとサブに聞き手を分けてチームでオーラルヒストリー調査を行っている。また、学生のインタビュー経験を増やすという目的もある。
- 10 <http://www.hosei-web.jp/semi/index.html>
- 11 2010年1月13日東京新聞(地方版)、2010年3月15日生産性新聞、2010年2月16日読売新聞(地方版)。
- 12 『「タウン誌カフェ」はじめます!』(2011)。
- 13 この場合、役割コンフリクトの中でも役割間コンフリクトが当てはまる。
- 14 役割間コンフリクトが若者の成長をもたらす事例については、田澤・梅崎・八幡・下村 (2010) を参照。